

## 研究発表レジメ

英米文化・文学

### 1853年の Missouri 州 Hannibal の地図、その経済的、文学的作成の試み

就実女子大学 和栗 了

Mark Twain は 1853 年 6 月の半ば頃に Missouri 州 Hannibal を出奔した。以後彼がこの町で生活することはほとんどなかったが、この町が Twain の作品に大きな影響を与えたことは明らかだ。例えば *The Adventures of Tom Sawyer* (1876 年出版) と *Adventures of Huckleberry Finn* (1884 年出版) の St. Petersburg、*Pudd'nhead Wilson & Those Extraordinary Twins* (1894 年出版) の Dawson's Landing はほぼ Hannibal を基にしている。

New York の Hart & Mapother 社が 1854 年に Hannibal のリトグラフ版の地図を発行した。この地図は Twain が少年時代に最後に見た Hannibal に一番近いものだ。これが Twain の描く Missouri の田舎町ではないとしても、それにかかなり近いものである。作品中の町の姿と実際の地図との異同を検証すると Twain の創作の意図がうっすらと見えてくる。

今回は、*Tom Sawyer* と“Villagers of 1840-3” (生前未出版) を参照しながら、Hannibal 時代の Twain の友人の経済的状況について地図から検証する。Twain の少年時代の友人達が比較的裕福な家の子弟だったとしたら、宿無しの Huck に対する子供達の羨望も再考せねばならない。ほとんど現存しないこの地図の複写を読みながら、Twain が描いた世界と書いたものとの違いと彼の意図を探ってみたい。

### 汝が車、星につなげ——エマソンと天文学

甲南大学 青山義孝

アメリカに“Hitch your wagon to a star”という格言がある。「大志を抱け」とか「野心を抱け」といった意味である。札幌農学校のクラーク博士が残した「少年よ、大志をいだけ」 (“Boys be ambitious!”) とほぼ同じ意味の格言であるが、“Hitch your wagon to a star”のもとになっているのはエマソンの文章であり、このエマソンの文章は甲南大学学園歌の「わが車 星につなぐ」の由来ともなっている。クラーク博士の“Boys be ambitious!”を知っているアメリカ人はいないだろうが、“Hitch your wagon to a star”を知らないアメリカ人は少ないだろう。

エマソンと天文学との出会いは古い。1803年生まれのエマソンは、10歳の時にボストン・ラテン学校に入学したが、ラテン学校在学中、エマソンはグールド校長に毎週レポートを提出していた。14歳の時、最後に提出したレポートのテーマが天文学であった。アメリカ最古の都市公園でもあるボストンコモンで見上げた星空の美しさに魅了され、それ以降エマソンは星空、宇宙、天文学に興味を抱くようになった。このときの神秘体験が、エマソン自身が「透明な眼球」に変容する『自然』のあの有名な文章の淵源となっている。ある意味でエマソン思想の種が胚胎していたのは天文学であったと言える。

エマソンは天文学の研究が宗教にもたらした重要な成果をふたつ挙げ、そのひとつは、「われわれのもつ神の観念を修正し、これを崇高なものにするとともに、われわれの人間観を謙虚なものにしたことである」と言う。二つ目の成果としてエマソンは、天文学は、神学の教義を修正、拡大した点で、否定できない効果があったと指摘する。

エレヌ・L. テュゼによれば、一つの時代をそっくり特徴づける想像力の傾向としての宇宙論的想像力がロマン主義的であった時代に、ロマン主義的想像力は「無限への逃走」に飛びついた。エマソンの天文学とは宇宙の無限性を認識するところから始まる。人間の目を小さな地球から、周囲の無限へと向けさせ、宇宙の無限性を認識させることによって、「神は人間のために、天を開き、宗教を改革し、精神を教育」し、「より高い真理」へと導くのだ、とエマソンは言うが、そのより高い真理とは「われわれすべてがその子孫であり、われわれすべてがその愛をうけている神についての厳かな教義」である。すなわち宇宙の無限性の認識が人間が神の子孫であること、神の似姿としての自己の認識をもたらすというのである。これがエマソンの思想の中核をなす「自己信頼」の観念へと発展していくことになる。以上の観点から、天文学とエマソンの思想との関係を探ってみたい。

## 英語学

### 目的語の量子性・累積性と述語の完結性について—日本語のアスペクト特性から見えること

甲南大学 中谷健太郎 甲南大学大学院生 青木奈律乃

Vendler (1957) 以降、述語のアスペクト特性は統語的な診断をもとに研究されてきた。とりわけ時間副詞との適合診断は代表的なものである。例えば述語が for 期間副詞表現との組み合わせを許す場合、その述語は未完結述語 *atelic predicate* であると見なされ (e.g., *He walked for 30 minutes/\*in 30 minutes*)、一方、in 期限副詞表現との組み合わせを許す場合はその述語が完結述語 *telic predicate* であると見なされる (e.g., *He finished his homework in 10 minutes/\*for 10 minutes*)。しかし実際には容認性判断には揺れが見られ、特に、完結的であるとされる達成述語が期間副詞句と本当に適合しないのか (たとえば *He ate an apple for 10*

seconds が本当に容認不可なのか) という点については先行研究においても揺れがみられる。

一方、達成述語 *accomplishment predicates* の完結性が直接目的語の量化によって左右されることは広く知られている (Dowty 1979 など)。たとえば *John ate an apple in 1 minute* は容認できるが *John ate apples in 1 minute* は容認性が落ちることが広く認められている。Krifka (1989, 1992, 1998) を始めとする形式意味論の研究においては動詞の意味論と名詞句の量化が相互に影響を及ぼすモデルが立てられている。そこで興味深い問題を提起するのが、量化表現が完全に随意である日本語における完結性である。つまり、日本語において「リンゴを食べた」といった表現における「リンゴ」は量化という観点から完全に曖昧である。そのような場合に「リンゴを食べた」という述語表現が完結性を帯びるのか、にわかには明らかではない。

本発表では、アスペクトに関する先行研究、特に完結性の問題についての先行研究を一定の時間を割いて概観するとともに、Aoki & Nakatani (2012), Nakatani & Aoki (forthcoming) の質問紙調査の結果をもとに、完結性の計算アルゴリズムについての仮説を検証する。先行研究においては、完結性解釈が語用論的な推論と関係付けられるという主張が見られる (Smolett 2005, Pinon 2008 等) が、本研究においては、完結性のみならず未完結性の解釈もまた語用論的推論に導かれると主張する。また、先行研究において Vendler 的達成述語と到達述語の区別が不要であるとの主張がなされている (Verkuyl 1972, Egg 1995) が、調査結果から示唆される結論としては達成述語と到達述語の区別は存在するという事も主張する (Dowty 1979, Pinon 1997, Martin 2010)。